
紅に沈んだ言葉

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅に沈んだ言葉

【NZコード】

N8879C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

僕はクラスで一番目立たなかつた。それなのに、突然クラスで人気者の二人に「友達になろう」と誘われた。その日から始まつた『事件』。クラス内で悪意が連鎖していき、辿り着いたのは知りたくないつた現実だつた。

1・クラスメイトから友達へ

瞼に唇が掠めたのを感じて、目を開けた。

思ったとおり、目を閉じる前に見た教室の天井だけが視界に入つた。しかし、寝る前には点いていなかつた蛍光灯が煌々と目に痛いほど輝いていたのが違つてゐる。僕は寝ていたわけだから、誰かが点けていつたのだろう。体勢を変えようと、ゆっくり身体を反転させてうつ伏せになつた。途端に状況がわからなくなつた。視界に入るのは赤一色で、まるで血の中にいるような錯覚を起こした。赤に取り囲まれてゐる。

「花弁……」

近くで見れば、赤いモノの正体は花弁であることがわかつた。しかし、花の種類は知識にはなかつた。何の花なのか、検討もつかない。

加えて、何故花弁が辺りを覆つてゐるのかわからなかつた。眠るまでは、ただの教室の床だつた。今わかることは、瞼を掠めたのは花弁だということだけだ。

「起きた？ 眠り姫」

発声の練習を受けたような明瞭な声は女性のもので、それは背後から聞こえた。すぐにその声の人物が推測され、無意識に溜息を吐いた。彼女を知らない者はこのクラスにいない。そして、この場にいるということは、この状況を作り出したのは彼女ということになる。

「僕は姫じゃないよ。君の方が姫みたいな顔してるとくせに」

皮肉で言ったのに、後ろに立つ人物はくすくすと楽しそうに笑つた。仕方なく体を起こし、後ろを振り返つて向き合つ形になると状況がわかつたが、それは一層混乱させた。

姫みたいに整つた容姿を持つ諭訪小百合は一面に広がる赤の中、腕を組んで姿勢よく立つていた。そして、その隣には当然のように

周防智哉が箒を持って床を掃いている。女王と従者を思わせるその構図は、最近になって見かけるようになつたものだ。二人はこれでいて仲が良い。ちらりと視線を下に向けると、周防が掃いた部分には床が見えている。

訳が判らないままその様子を見ていると、周防は顔を上げた。可愛い部類に入る整つた容姿は無表情で、床を掃く手を休めることはなかつた。

「説明がいる？」須賀由宇

「フルネームで呼ばないでくれる。で、これは何」

「秘密」

ふつと嫌味に口元を上げた周防は、興味が無くなつたかのように視線を下へと遣つた。

じゃあ言うなよ。その言葉を飲み込んだ。言ったところでは意味を持たない。今できることは全然手伝う気のない諏訪に構わず、周防に手を貸すことだけだつた。この赤は嫌な気分になる。血を連想したこともあるが、不吉な感じがして本能がそれを拒んだ。

仕方なく立ち上がり、教室の隅に備え付けられている掃除用具入れから箒を取り出した。床で寝ていたため、身体は固まつていて動き難い。気合を入れる意味も込めて両肩を回した。

諏訪はそれに満足そうに頷き、側にあつた椅子に座つた。本当に手伝わぬいつもりのようだ。この状況に耐えられるなら、手伝う必要はなかつた。明日にでもなれば、不快に思う誰かが片付けるだろう。しかし、その場合疑われるのは僕だ。最後に残つっていたのをクラスメイトに見られていた。その理由がなくても、僕自身が不快に思つ誰かの一人なのだから、片付けないわけにはいかなかつた。

机は授業が終わつたままほぼ等間隔に並べてあるため、掃きにくい。何度も机と椅子の足に箒が当たる。それを気にする風もなく、周防は黙々と掃いていた。元々器用なのか、机や椅子に軽く当たるだけで綺麗に掃いていく。その様子を暫く見ていたが、ふとこの状況の不自然さに気付いた。

「もしかして、僕が起きるのを待っていた？ 友情とかじゃないよね」

「何故、ここに一人がいるのか。

諏訪と周防とは友達と言えるほど付き合いはなく、ただのクラスメイトだった。まだこのクラスで友達といえるほど的人はない。今は必要なかつた。しかし、クラスでは僕と一人は何故か同じところに位置付けられていた。名字が『す』で始まるという共通点が大きいが、協調性がないという意味でも似ている。しかし、僕は二人とは全く違うと思っていた。特に特徴のない顔の自分に比べ、二人の容姿は明らかに人目を惹くものだつた。だからこそ、同じ位置付けであつても二人とは関わりを持とうとは思わなかつた。劣等感はないと思うが、絶対にないとは言い切れない。人と比べられるのも面倒だし、クラス外では当然のように同列に扱われていらない。

そんな葛藤を知つてか知らずか、諏訪は綺麗に笑みを浮かべた。意識しての笑みに惹かれるものはなかつた。

「友情だと思つていい？ それでいいなら、由宇って呼ばせてもらうけど。もちろん私は小百合って呼んでね。あと、起きるのを待つていたのは正解よ」

「……どうぞ」

友達になるのに断る理由がなかつた。ただそれだけだつた。それなのに、諏訪もとい小百合は嬉しそうに表情を緩めた。綺麗を意識した笑みではない自然の表情は、思わず目を奪われるものだつた。それはただの美的感覚が反応しただけだ。恋愛感情では決してない。

「僕も入れてくれる？」

「君が希望するなら。で、起きるのを待つていた理由は？」

智哉も同意を得たのが嬉しかつたのか、嫌味を全く含んでいない笑みを微かに浮かべた。智哉の無表情以外の顔を見たことがなかつた。さつきみたいな嫌味な感じの笑顔は何度か見たことがあるが、この表情は反則だ。クラスで人気一位二位を争う一人にこんな表情をされたら、こちらまで伝染するに決まつてゐる。自分で確認で

きないが、きっと仕方ない、とでも言つような困った笑顔をしているだろう。小百合は笑顔を苦笑に変え、智哉は顔を少し顰めて手を前に出した。智哉が差し出した手に意味を取り違えることなく箒を渡し、大体掃き終わった床に残った花弁を手で摘んでいった。机と椅子の隙間は箒が届かない。

少し離れたところから、小百合の声が聞こえた。
「これから起ることに關わって欲しいの」

2・そして事件へ

「これから起ること……未来のことなのにわかるんだ？」

「今だから、ね。もちろん智哉も関係することよ」

未来のことが確定しているかのように話す小百合は自信満々で、間違っている可能性を考えていないう�だった。それほどまでに、決まりきったことなのだろうか。智哉も特に意見はないようで、納得していることがわかつた。少し疎外感がある。二人は何かを知っている。

その思考を振り切るように花弁を全てゴミ箱に入れた。教室は元に戻った。寝る前の教室の姿だ。今更だが、教室の床で寝ていたことについて一人は何も訊かない。訊かれても困るのだけれど、全く関心がないことを示しているようで憂鬱になる。そう、一人とは質が違う。本当は同じ位置になんていない。

「関わるってどうやって？」

「自然と巻き込まれるよ。嫌でも」

智哉は掃除用具入れの扉を静かに閉めた。先程の問い合わせではわからなかつた声が耳に留まつた。抑揚のない声は顔に合つたもので、少し高めなところも想像を裏切らない。

それよりも、普段よりも表情が柔らかい二人にどうしていいかわからなかつた。何が一人をそうさせているのかわからないから、余計に混乱する。いつもはその容姿で人を遠ざけないながらも一種の拒絶する空気を纏つっていた。それを緩和させているところなど見たことない。それが今、ピンと張り詰めた何かが切れたかのように空気は穏やかだつた。

本当に、どこかが切れたようだつた。

「面倒よね、ホント。余計なことをしてくれたわね、あのカマキリ」「カマキリだから仕方ないよ。これを利用するのもいいしね」

こんな二人も見たことなかつた。棘のある会話を当人は気にする

ことなく続いている。カマキリというのは生物の男教師で、顔がどうなくカマキリに似ていることから安直に付けられたあだ名だった。他の生徒と同じようにその俗称を使うような人ではないと思っていた。しかし、目の前で一人はくすくすと無邪気な顔で、楽しそうに笑つて悪口を言つている。

別にショックは受けていないけど、僕の前でこの姿を見せるのは何故なんだ。

「藤田先生が関係してるわけ？」

「さすが由宇ね。そう、カマキリが種を蒔いたの」

小百合は宣言したとおり、僕を名前で呼んだ。先に許可を求められていたので、自然と受け入れられた。その言葉の中で引っ掛かったのは、一つの単語だけだった。

種。生物の教師だからといって今の会話に植物の話はなかつた。邪に動物のモノだと考えて繋がりはない。では、種とはなんなのか。植物の種ではないのなら、言葉遊びの類か。

「話のタネ、とか」

「うーわビンゴ。何でわかるかな」

当たつていたらしい。しかし、藤田先生の話の中で、『種』に当たるものはなかつたような気がする。思い返してみても、引っ掛かるものはない。…多分。

何故か感心している小百合は何度も頷き、側に置いてあつた鞄を手に取つた。

「まあ、本質はこれからわかるわよ。さ、帰りましょ」

小百合は後をついてくることを確信した足取りで教室を出て行つた。あの自信はどこから来るのであつ。いや、実際後については行くんだけど。

智哉も当然のようにリュックを背負つた。そういうば、智哉は小百合とは楽しそうに話していたが、僕には意味深なことを言つただけだつた。元から無口な方であるのは知つてゐるが、それでも極端だと思う。別に無理に話せとは言わないけど。

少し考え込んでいたようで、廊下から小百合の急かす声が聞こえた。僕がいなくても智哉がいるならいいじゃないか。そう思つて顔を上げると、教室と廊下の境目で待つ智哉の姿が目に入った。もしかしながら、待つ正在中であるのだろうか。

「……智哉？」

「何」

迷いながらも呼んだ名前に、智哉は反応した。無表情であるのは変わりないが、しつかりと目は向けられている。男子にしては大きい目は続く言葉を待つているようだつたが、何かを言うために声をかけたわけではないから続く言葉なんてない。

何を言えばいいんだ。

「えっと、待つてくれた？ 僕のこと嫌いじゃないんだ？」

「何で嫌いになるのさ。友達だつて言つたばかりなのに」

心底不思議そうに眉を寄せて首を傾げる智哉に慌てて「ゴメン、と謝つた。疑うのは失礼だ。小百合も智哉も友達だと言つたばかりなのに信じないのは裏切り以外の何物でもない。釣り合わないことはわかっているが、二人の気持ちを無視することなんてできなかつた。急いで智哉の横に並ぶと、智哉は無表情の中にふつと微かに口元を緩めた。

だから、その反応は何。

「僕が由宇のことを嫌いだと思ったのは何で？」

智哉はさらりと僕を名前で呼んだ。前から呼んでいたように、何の違和感もなく。自然で、それが当然かのように。小百合からは事前準備があつたから良かつたが、智哉から呼ばれるとは思つていなかつた。すぐに言葉が出なかつた。

今日、クラスの中で特別に位置する一人に名前で呼ばれてしまつた。

「えつ……全然話さなかつたから。小百合とは仲良く話していたのになーと」

「……変に鈍い」

鈍いって何が。智哉は呆れたように溜息を吐くと、小百合を追いかけるように廊下を進んで行つた。それに遅れないよう早足でついて行きながらも、先程の言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。呆れられるようなことを言つた覚えなんてない。一人で考えるより訊いた方が早い。智哉に声をかけようと口を開いたと同時に、廊下に叫び声が響いた。

女性の金切り声が尾を引く。

「どこから！？」

「プールの近くよ」

小百合は僕と智哉の間を通り過ぎ、玄関とは反対方向に走って行つた。それに間髪入れずに続いた。

小百合がプールの近くだと言うのだからそうなのだろう。あの確信を持った声は確實だ。しかし、何が起こったのか。ホラー映画でしか聞いたことのない叫び声は、恐怖を感じているのが嫌でもわかつた。小百合は迷うことなくプールに向かつて走っていた。

体育館とプールを繋ぐ渡り廊下に続く道へと角を曲がつたところで、それは視界に入った。

コンクリートの上には赤いペンキのようなもので円状の何かが描かれていて、その中に生徒が一人いた。ガタガタと震える女生徒と、それを支えるように肩を抱いている男子生徒。よく見ると、二人はクラスメイトだつた。

「真弓くん、何があつたの？」

「僕もさつき着いたところです。叫び声を聞いて走ってきたら、佐藤さんがここで倒れていたんです」

クラスメイトの真弓夏目はいつもと変わりなく丁寧に話した。冷静に見えるが、この状況で冷静でいられるわけがない。佐藤真美の肩に添えられた手が震えているのは佐藤の震えだけではないだろう。段々と人が集まり始め、辺りは騒然とした。まずここで優先するべきことは、保健室へと佐藤を運ぶことだ。

「真弓くん、佐藤さんを保健室へ。根岸さんもついていってあげて」小百合は判断を間違うことなく指示した。声を聞いて集まつた人だからの中には佐藤の友人の根岸裕子を見つけ、付き添うように言ったのも的確だ。

真弓と佐藤が離れたため、コンクリートに描かれたモノがはつきりとわかつた。印象だけで言えば、禍々しいとしか言えない。明らかな悪意に吐き気がした。思わず口元を押さえる。赤いペンキのよ

うなもので描かれた円状の中には星のような形があり、文字らしきものが見て取れた。

「これは…」

「魔法陣」

数学の『魔法陣』でないことは、この状況を考えればわかる。しかし、小百合の口から漏れた言葉は現実からかけ離れていた。魔法ファンタジーでしかないものだ。智哉は小百合に同意して頷き、コンクリートに片膝を着いて赤い液を人差し指で掬つた。

「血だ」

その言葉に周りで様子を見ていた生徒達はどうよめいた。変に低い、小さな声で囁く声が耳に煩わしい。小百合はただ「そうね」とだけ返し、図形を検分し始めた。小百合と智哉は平然としているが、僕は目を逸らしたかった。気持ち悪いのは血ではない。この状況だ。

血だと言われてみれば、その色からして納得できた。鮮やかな赤は静脈からの出血だつたか、と曖昧な知識が脳裏に浮かぶ。そして、確かに鼻を掠める臭いは生臭かった。

生臭い？ 人の血つてこんな臭いだつた？

「人の血じゃない…魚？」

「その辺りね。鶏かもしれない。ただ、これは人の血じゃないことは確かね」

小百合は満足したのか、人垣を割つて現場から離れた。智哉も小百合の後に続き、僕は智哉に袖を引かれてついていった。集まつた生徒は状況が理解できないようで、ただ立ちすくんでいた。情報処理が上手くできないようだつた。僕が向こうの立場なら、きっとそくなつている。女生徒の悲鳴。佐藤と真弓。奇妙な図形の『魔法陣』。何かがわかっているような小百合と智哉。何故か一人と一緒にいる僕。これをどう整理すれば、理解できるようになるのか検討もつかなかつた。

智哉に袖を引かれながら、当初の目的のとおり、靴箱へと辿り着いた。何もなかつたかのように先に着いて靴を履き替えた小百合は、

固い表情で振り返った。

「早かつたわね」

「そうだね」

智哉も靴を履き替えて爪先をトンッと蹴った。一人だけでわかっている。何が、とはもう訊かなかつた。二人は違う事前情報を持っている。それがわからない限り、二人の会話にある隠された主語は見つけられない。今はただ、あるだけの情報を整理することに専念した。

何も言わずに帰る準備をした僕を見て、小百合は口の端を上げた。「種が発芽したのが予想より早かつたってこと。それよりも由宇、さすがね。私が言わなかつたら、私が言ったことを全部言つつもりだつたでしょ」

本当に何故わかるのだろう。確かに、誰も言わないのなら指示しようと思つていたことは小百合が言つたことと同じだ。野次馬が集まって来てからでは遅い。しかし、僕が言つて従つてくれるかが問題だつた。だから、小百合が言つてくれたことにほつとしていた。指示は命令に似ている。そこには従おうという意思の形成が前提だつた。小百合なら、皆が従おうとするだらう。それくらいの影響力を持つている。

何でもお見通しのような小百合はにっこりと笑い、その後にすぐ顔を引き締めた。

「あの魔法陣、悪意を感じたわ」

「加えて血。呪いのつもりでやつたんだろうね」

あの禍々しい図形は『呪い』と言われば、それが一番適当だつた。血で描かれたそれは悪意以外の何も感じられず、強い思いが伝わってきた。

その中心で倒れていた佐藤。なぜあんなところにいたのか。制服は人ではない何かの血で塗れ、まるで佐藤自身が血を流しているようだつた。身体は傷付いていないのかもしれないが、震えていた佐藤は内面で傷付いているに違いない。

「小百合、何故そんなに詳しい？」

「ただの趣味よ。一時ブームになつてたときに釣られてね。魔法陣とかの本は結構見かけるし」

それだけでこんなに詳しくなるわけない。しかし、本当の理由を聞こうとは思わなかつた。その類のことに詳しくなるほどの何かがあつたことは容易に想像できる。

魔法。どこかで聞いた単語だと思っていたが、思い出した。昨年の今頃、陰陽師などの不思議な力のようなものが流行つていた。そのとき、小百合は一部の女子から陰湿ないじめのようなものを受けていた。それを知ったのは偶然だったが、そのとき小百合は屈することなく悠然としていた。紛い物の呪術には正論で対抗していたのを思い出し、納得した。

今回の出来事は、小百合が一番理解できるだらう。

「あつ 真弓くんだ」

靴を履き替えて帰ろうとしたところに、真弓が保健室から出てきたのを小百合は見つけた。保健室は靴箱の隣にあり、その隣に職員室がある。職員にとっては親切な配置で、保健室にとっては玄関に近いのは緊急事態に対応できる絶妙な位置だった。

真弓は小百合の声に気付き、疲れた笑みを見せた。しっかりと足取りで歩いてくるが、それは気を張り詰めていないとすぐに崩れそうだった。そう、見えた。

「お疲れ様、真弓。大丈夫？」

「…須賀くん。僕は大丈夫です。ただ、佐藤さんが怯えてしまつてちらりと保健室に視線を遣つた真弓は溜息を吐いた。自分の無力を感じているように見えた。真弓が悪いわけではない。それなのにただのクラスメイトを心配する。そんな真弓は想像していたとおりの人物だった。

想像を悉く壊してくれる一人とは正反対だ。

「真弓くん、何があつたか教えてくれる？」

僕の前とは違う、いつもの大人しい感じで小百合は訊いた。真弓はその演技に気付いているのかいないのか、微塵も感じさせないで答えた。

「佐藤さんは誰かに呼び出されてあの場所に向かつたそうです。そして、角を曲がつたところで背中を押されて倒れこみ、それがあの円の中だつた、と」

「それじゃ、怯えるのも仕方ないわね…素人でもアレが何なのかはわかってしまうもの。真弓くん、アレは何だと思った？」

「呪い、だと思いました」

小百合は静かに頷いた。直接あの赤い液体に触れてしまった真弓なら、あの液の正体はわかっているはずだ。生臭さはそのまま、邪

悪さに転換する。佐藤は誰かに呪われているという妙な確信が湧き起きた。

それじゃ、相手の思う壺だ。

「真弓」あれば魔法陣だ。なら、その効果は呪いだけじゃないはず。君が思考を偏らせる這はないと呪うけど、第一発見者の君が偏見を持たないようにしてほしい。独りで責任を負おうとしないように」「…そうですね。須賀くん、心配しないでください。僕は打たれ強いんですよ」

打たれ強いというのはただの我慢だ。痛いのには変わりない。真弓も佐藤同様被害者だ。そんな真弓に忠告だけは厳しく言つたが、真弓の心配をかけさせないように配慮する言葉に力を抜いた。

打たれ強い。そんな真弓も小百合のように、強さの後ろに何かを隠しているように感じた。

「僕は真弓を心配したいんだよ。君が迷惑でも

「有難う御座います」

ふつと少し安心した笑みを浮かべた真弓にそれ以上言つことはなく、横で遣り取りと見ていた小百合と智哉に目を向けた。

小百合は優しい笑顔をしていて、智哉は困った笑みを作っていた。

「もう用は済んだよね。さよなら、真弓くん」

智哉は笑みを一瞬にして消し、別れの挨拶を投げた。その智哉に何か思うところがあつたのか、真弓は面白そうに口元を緩めていた。真弓の気が紛れて表情に余裕ができたのは良いが、何故そうなったのかわからない。智哉の何が真弓に影響を与えたのか。わからぬことだらけだ。

「一つだけ教えてくれないかな」

「何ですか?」

「すぐにあの場所がわかつた? 小百合はすぐにわかつたみたいだけど」

素朴な疑問に、真弓と小百合は苦笑で答えた。変な質問だつたか、と考えてみても可笑しなところはないと思つ。場所を特定できるほ

ど、あの叫び声に何が含まれていたのだろうか。

「知っている人にはわかるんですよ。あの場所からの声は「体育館とプールの間だから、変な響き方がするのよ。人気がないしね。まあ、たまに放送部とかが発声練習に使っていたりするから、その響きを聞いたことがあればわかるはずよ」

あつさりと謎解きは終わった。まあ、由宇ならわからないかもねーと小百合が付け加えたのに、真弓は笑顔で頷いた。僕ならわからない、というのが引っ掛かった。帰ろうとしていた智哉も困ったような表情で口元を緩めていた。あの場所は何度も言ったことがある。遠くから聞かないとわからないということか。

「須賀くん、諏訪さんと周防くんと仲良くなつたのですか?」「友達になつた。ん? 真弓も僕と仲良くなりたい? あー小百合達の方かな」

名前で呼び合っていたのに気付いたのか、真弓は鋭く指摘した。それは小百合の誘いの言葉に似ていて、鎌をかけてみた。僕と仲良くなりたいのではなく、小百合と智哉と交友関係を築きたいだけなのかもしれないけど。

その問いに、真弓は楽しそうに笑つた。

「仲良くなるのは喜んでお願ひします。ただ、何故今を選んで友達になつたのかと思いまして」

「今だから、よ」

小百合は事も無げに答えた。それは明確で、真弓には間違いないなく意味は伝わったようだった。ということは、真弓も小百合と智哉に見えている未来像を少しは知っているということになる。今、この時点は何かを変えるのに適しているといつのは、何を暗示しているのか。

結局答えは出なかつた。

「さよなら、周防くん。有難う御座いました、諏訪さん。また明日、須賀くん」

真弓の挨拶はそれに違つていた。違いは微妙だが、少しだけ

差を感じた。それを感じ取ったのか、智哉は悔しそうに顔を顰め、その智哉の反応と真弓の機転の良さに小百合は含み笑いをしていた。とりあえず、真弓に「じゃあ、また明日」とだけ返して先に歩き出した智哉の後を追つた。初めとは逆に、小百合はゆっくりと後ろを歩いた。

何かが着実に変わつてきている。それは前進なのか後退なのか。その答えを知るのが今は怖かった。それは高揚感を伴うスリルのようなものだった。

「あれ、こっち方面だっけ？」

学校を出てから一十分は経っている。普通に話していく時間に気が回らなかつたが、駅を通り過ぎていた。確か一人は電車通学だったはずだ。僕の家は駅を少し越えたところで、駅からは徒歩で十分ほどだつた。片道三十分の通学で自転車ではなく徒歩通学なのは、ただの健康のためだ。

小百合と智哉は今更、という顔をした。

気付くの遅くて悪かつたな。

「んー純粋な由宇くんを送つて行こうかなーと」

「純粋って何。それって言い換えると馬鹿つてことになるけど」

「馬鹿じや意味が違う。送られるのは嫌？」

窺うように首を傾げて上目遣いに見る智哉に頭痛がしそうだつた。ただでさえ可愛い顔なのに、それを意識しての仕種は一層智哉の姿を強調させた。思わず頭を抱える。

助けを求めるように小百合を見ると、小百合はわかつたとでも言うように智哉の耳に何かを囁いた。途端に智哉はふっと息を吐いていつもの無表情に戻した。

だから何があつたんだ。一人が僕のわからぬところで理解し合つている。そして、真弓も何かがわかつてゐる。…もしかしなくとも、仲間外れにされている。いや、智哉が言つたことを今は信じよう。「送られるのは嫌じやないけど、君たちが遠回りになるのが気が引けるだけ」

「これは私たちの自己満足よ。帰るときくらい長くいひたいなつて。友達になつたばかりだしね」

真弓の前での大人しさは消え、小百合は快活になつてゐた。生き生きしているのは見ている方も氣分が良い。楽しそうにしているとこうを申し訳ないのだけど、足を止めた。同じように一人も止まつ

た。

「二三郎が僕の家。今日は突然だから帰つてもううなび、事前に言つてくれれば用意しておくから、上がつていいって」

家はきちんと掃除してある。しかし、客を迎える用意はできていなかつた。家に上げるのだから、茶菓子の用意くらいはしておきたい。それくらいのもてなしさは弁えている。

一人は驚いたように顔を見合させ、くすくすと笑い始めた。その様子は教室での悪巧みに似ていたが、表情が違つていた。僕の前の振舞いだけは演技をしていないようで、誤解しそうになる。

僕は君たちにとつて特別なのか？

「うん、じゃあまた上がらせてもらひつよ。明日は昼食の用意をしないで来てね。また明日、由宇」

「じゃあねー」

ひらひらと手を振る一人に手を振り返した。放課後、教室で由宇が覚めてから一時間も経つていない。それなのに展開は速かつた。

これが藤田先生の蒔いた種の影響か。発芽が早かつたというのも関係しているのだろう。智哉が「巻き込まれる」といつていたのが気になつた。もう巻き込まれているのか、それともこれからなのか。玄関の扉がいつもより重く感じた。

6・事件とクラスメイト

次の日、佐藤は三時間目に登校してきた。顔色は悪く、昨日のことを引きずっていることがわかる。クラスの大半は、すでに朝に担任から昨日の出来事を聞いたため、佐藤に不謹慎ながらも好奇心を含んだ視線を向けていた。

少しばは遠慮しろよ。担任の説明は端的だったが、端折りすぎていて興味を誘うのに充分だった。「昨日、誰かが呪いの真似事をしたようです。皆さん、くれぐれも真似しないでください」なんて、噂になるに決まっている。実際その場に駆けつけたクラスメイトが、事の詳細を得意そうに話していた。「あれ、魚の血だったんだってさ」という情報だけは初耳だった。

嫌な感じだ。それに佐藤が加わって空気が濁んだようだった。感染するような気がする。

「ううのは昔から嫌だつた。」そこそと集まつて悪口を言つ。自分は仲間に入つているから対象になる心配はない。そして、みんなが言つていてるから自分は悪くない。そんな悪循環が生まれていく集合体。

だから、あまり関わり合いたくなかったから、協調性なんて持たなかつた。佐藤に不躾な質問をしている声が聞こえた。

「お前、誰かに恨まれてんのかよ？」

ハハハ、と乾いた笑いが辺りを包む。何故それを言つんだ。佐藤は肩を震わせていた。ここからは見えないが、泣いているのかもしない。それを庇うように根岸が佐藤の肩を抱いた。

「そんなはずないじゃない！ 真美は恨まれるような子じゃない！」

それは違う。人は知らない内に恨みを買つていてもある。それは庇うことにはならない。

教室の中は、佐藤に同情するだけでなく、佐藤に非があつたのではないかと疑う者もいるようだった。ヒソヒソと交わされる会話は、

佐藤にも聞こえているはずだ。聞こえるように言つてゐる可能性もある。

何故、誰もそれが『呪い』ではないのではないかと言えないんだ。

「あれは『呪い』じゃないのかもしない」

教室の中はしんと静まつた。佐藤は振り返り、希望を見出したよう見えた。

僕の言葉は意外だつたらしく、少なからず衝撃を与えたようだつた。少し考えればわかることなのに、さも今氣付いたかのように根岸は振舞つた。友達なら、すぐに思い当たつてもいいはずだ。恨まれるはずない、と言い切れるなら余計に。

反論されたのが癪に障つたのか、佐藤をからかつていた男子生徒、黒井は叫んだ。

「呪いに決まつてるだろ！ 魚の血で描かれているのが証拠だ！」

「あれは呪いじゃないわ」

黒井の台詞を小百合は打ち消した。立ち上がりつきっぱりと言いつつた小百合は大人しいながらも、確信させるのに充分な声音で言った。変に自信のある声はそれ以外の答えを否定させる効果があつた。

黒井は何も言えなかつた。それを確認してから、小百合は佐藤を見た。

「意図は呪いだつたのかもしれない。だけど、あれじゃ意味がないわ。どちらかといえば、佐藤さんにとって良い結果になるものだつたわね」

「何で… そう言えるの？」

「完璧じゃなかつたから」

につこりと笑つた小百合に、佐藤は安堵の溜息を吐いた。張り詰めていた氣が緩んだような、肩に載つていた重りが下りたような表情だつた。小百合の笑顔が言葉に力を与える。

僕が言わるのはその理由が大きい。人によつて言葉が与える影響が違うのなら、適任の方が言えばいい。今の状況では僕の言葉に

は力がなかつた。小百合だつたからこそ、あの不吉な図形の本当の意味がわかり、普段から注目されていることもあり、その言葉は素直に聞き入れられた。

「でも、『呪い』には違ひないってことよね？」

余計なことを。根岸は心配を装つて佐藤に追い討ちをかけた。途端に佐藤の表情は固まり、顔色は青くなつた。

小百合はやれやれ、と首を横に振り、根岸に鋭い視線を遣つた。
「そうなるわ。でも佐藤さん、私はあなたにとつて良い結果になるものだつたと言つたわよ？ どちらを信じるかはあなたの自由」
話しあは終わつたとばかりに、小百合は椅子に座つた。また教室が静まり返つた。

三時間目の開始を知らせるチャイムが大きく響いた。

7・昼食（智哉作）

「智哉の手作り？」

昨日昼食の用意をしてくるなどと言われたので、何も持ってきていなかつた。昼食の時間になると、食堂に向かつ生徒と同じ速さで小百合と智哉はこちらに向かつてきだ。智哉の手には、古風にも風呂敷に包まれた重箱が握られていた。

今は空いている前の席を反転させ、小百合は座つた。智哉も重箱を机に載せ、隣にあつた椅子を間に置いて座つた。

「そう。今日は智哉が昼食当番よ」

「昼食当番？」

智哉は漆塗り風のプラスチックの皿を配り、それに合つた箸も配つた。その間に小百合は風呂敷を解き、三段の重箱を崩していった。

一段にはちらし寿司が入つていて、他の二つはおかずになつてゐる。どれもお店に売つてゐるよつたもので、智哉の手作りというのが信じられなかつた。

いや、信じるけど。

「交互に昼食を作つてきているんだよ。前まで毎日一人分を作つてきていたから、効率は良いよ」

智哉が手を合わせたのを合図に「いただきます」の声が重なつた。小百合はそそくさと自分の小皿に分けていった。智哉も丁寧に自分の分を取つていつているのを確かめてから手を伸ばした。

とりあえず、好きな玉子焼きを小皿に取つた。

「美味しい…」

口に入れてすぐに汁の風味を感じられた。咀嚼する度に口に出汁と卵の味が広がる。これは普通にお店に出せるんじゃないかな。思わず漏れた感想に、智哉は安心したような、ふつと緩んだ笑みを見せた。

「和食はやつぱり智哉ねー。ちなみに私は洋食が得意よ。由宇も昼食会に参加する?」

小百合は満足そうにいろいろな種類を少しずつ食べていた。きちんと全て飲み込んでから話している。一人の丁寧に箸を口に運ぶ所作や、食事中のマナーの良さは感嘆するものだった。僕は別に気にしないけど、おかずを取るときは箸を逆さにしている。容姿に加えてのこの礼儀正しさは賞賛に値する。まあ、僕も最低限の礼儀は弁えているけど。

昼食会に参加するということは、僕も順番に昼食を作ってくれればいいってことかな。でも、一人の料理の腕は確かのようだし、僕が作ったもので良いのかが疑問だ。

「僕も料理作つてくれればいいわけ? 得意つていえるのは中華だけど

『作つてくれるの?』

驚いたように、そして期待するように声を揃えてこっちを見た二人の表情は小さい子供のようにわくわくしたものだった。

口から苦笑が漏れた。僕が作るというのは意外だったようだ。話の流れからそれは当然だと思っていたけど、そうじやなかつたらしい。

そんなに期待されても困るんだけど。

「僕が作るので良ければ。じゃあ、明日作つてこようか?」

『是非!』

嬉々とした声は自然と重なった。仲が良いんだな、とそんな様子を見ていつも思う。いつから一人は仲良くなつたのだろう。このクラスになつてから、大体のグループは把握している。一学期の初めは二人に接点はなかつたはずだ。それが、大した会話もなしに一緒にいるようになつたようだつた。

その中に何故僕を誘つたのか。二人が付き合つているのをカムフラージュするためか、と疑つてみても、そんな様子はなかつた。理由が欲しいけど、それを訊くのは憚れた。

「じゃあ、何か希望はある?」

「んー春巻きが食べたい。生でも揚げたものでもいいわ」

「御飯はチャーハンがいいな」

頷いてから顔を下に向けたまま、一人の希望に必要な材料を考えた。冷蔵庫にある物、帰りに買う物。弁当ということを考えると、冷めても食べられるような物。煮物を口に入れて噛みながら考えを纏めた。

ふと顔を上げると、じつとこっちを見ている一対の瞳に合った。これはちょっと。

照れるじゃないか。

「由宇に見返りなんて求めてないのにね

「作ってくれるなら嬉しい限りだけど。明日が楽しみだよ」

自然と団欒な空気が漂っていた。昨日友達になつたばかりなのに、ずっと前からの付き合いのように感じる。それが僕だけでの祈るばかりだ。

このとき、周りから様々な感情が籠つた視線が刺さるのを感じていた。羨む者、恨む者、妬む者、それは僕に向けてのものだつた。わかっている。僕はこの中では異質だ。特に目立つことのない、普通の域を抜け出さない顔に、特別に頭が良いわけでも運動ができるわけでもない僕は、一人と並ぶことが変だつた。協調性のない『す』繫がりの三人、というだけの同じ位置付けをしないクラスメイトもいる。

でも、一人が必要とするなら別だ。一人が僕を友達と選らんだのに、僕がそんな理由で拒絶するのはおかしい。協調性のない『す』だけの繫がりが、友達という関係になつてもいいじゃないか。その視線を無視し、僕は一人に笑顔を向けた。

8・悪意の連鎖

放課後はいつもと同じように訪れた。しかし、ビニカ不自然だった。

ストレスに耐え切れなくなつたのか、佐藤は六時間目が始まる前に早退した。そして、僕に対して変な視線が付き纏つっていた。

別に気にしないけど。

「由宇、特別棟に寄つてから帰らない？」

小百合は荷物を入れた鞄を肩に掛け、帰る用意をして机の前に立つた。智哉もリュックを背負つて待つていた。一緒に帰るのは昨日からの習慣だ。

「いいよ。今日は帰りに荷物を運んでもらひつ」とになるけど

「それは予定の内」

こんなとき、智哉の素つ氣無い返事が嬉しい。荷物持ちなんて嫌な顔をされるものの部類に入るのに、智哉と田が合つたので、笑顔で嬉しさを伝えた。

智哉はすつと視線を外し、小百合の方へと向いた。もしかしながら、智哉は僕の笑顔が嫌いなのだろうか。普通に話しているときはしっかりと目を見るのに、笑顔や表情を緩めると変な反応をする。それは小百合も同じだつた。二人は僕の笑顔が嫌いだという結論に達してしまうのは仕方がない。

また機会があつたら訊いてみよう。嫌な気分にさせるのは僕だつて嫌だ。

僕の準備が整い、クラスメイトの奇妙な視線を背に教室を出た。

「音楽室に教科書忘れちゃって」

小百合は音楽室のある特別棟へと繋がる渡り廊下を田指してすたと歩いた。背筋はきちんと伸び、自然と綺麗な歩き方をしているところが小百合らしい。智哉は小百合のような上品さではないが、姿勢良く歩いている。後ろから見ていると見本のようで気持ち良か

つた。

自信があるように見えるのは、背筋を伸ばしている影響が大きい。それに見合うものを持つているのだから、人の目を惹いて当然だろう。友達になつて近くで見ると、それははつきりとわかつた。

だから、一層自分とは遠い所にいるように感じた。

「由宇と智哉は書道だつたわよね？　由宇、書道が得意なの？」

渡り廊下を過ぎて特別棟の一階に入つたところで、小百合は顔だけ後ろを向いて話しかけてきた。一階には書道室がある。三階には美術室があり、目指す音楽室は四階だ。

「得意というより、好きなだけ。墨の匂いが好きで始めたんだけど」

「謙遜だね。由宇は達筆だよ。真弓くんと並んで、クラスでトップだから」

なんて褒め方するんだ。智哉は説明するように淡々と言つたが、それでも内容は僕を喜ばせるのに充分だつた。得意と好きは違う。しかし、それに実力が伴つていて認められることは、僕にとつて至福だつた。

それが智哉になら、余計に嬉しい。顔が緩んでしまった。でも、僕の笑顔が嫌いなのかもしれないという懸念があるから笑顔は隠そう。

「ありがとう、智哉。君だつて綺麗な字を書くけど」

智哉の真似をしてさらつと言つてみた。小百合はおや、という表情をして笑みに変え、智哉は意地悪そうな笑みを作つた。だからなんでそんなに素の表情を出すかな。僕は特別だつて自惚れそうになるじゃないか。

「あー良いわよね、智哉は。私も書道にすれば良かつた」

仲間外れの気分なのか、小百合は不満そうに顔を顰めて先に階段を昇つて行つた。智哉は自然と僕の隣について、小百合の拗ねている様子に仕方ない、というように苦笑した。僕もそうだな、という意味を込めて眉を上げた。この距離感は悪くない。二人の間は心地良かった。

特別棟には人は少なく、部活をしている生徒以外は見かけない。特別棟を使う部活は書道部と美術部と吹奏楽部で、書道部と美術部の活動している一階と二階は静かだった。しかし、四階に上がると吹奏楽部が練習している音が微かに聞こえた。音楽室は防音設備が整っているので、微かに漏れているのは隙間が空いているからだろう。小百合はゆっくりとドアを開けて中へ入つて行つた。

音楽室の隣には図書室がある。図書室の入り口には掲示板があり、そこには新刊や入荷した本の紹介が載つている。小百合を待つ間、その掲示板を見ていた。智哉も隣に立つて同じようにしていた。

そのとき、近くから悲鳴が聞こえた。昨日と同じような恐怖の渗透だ女生徒の声。それは昨日の出来事を甦らせた。

声は図書室を過ぎた階段の方から聞こえた。

「智哉！」

智哉は頷き、先に走つて行つた。僕は小百合が来るのを待つてから後を追いかけた。小百合なら教室にいてもどこから声が聞こえたかわかるだろうが、一緒に行つたほうが確実だ。図書室を過ぎたところで足を止めた。

階段を下りたところに、根岸と真弓、そして智哉がいた。根岸は身体を震わせて廊下にしゃがんでいて、真弓は昨日と同じように根岸の肩に手を置いていた。昨日と同じ光景。その中で違つていたのは、根岸の周りに長方形の白い紙が散らばっていることだった。智哉は落ちている紙を一枚取つた。紙には何か書かれている。

「やつぱりね」

小百合は状況を理解したようで、階段を下りて行つた。ここにいても仕方ないので、小百合に続いて階段を下りる。

「まだね」

「魔法陣の次は札。素人が手を出していい領域じゃないのに」

小百合は智哉から紙を受け取り、ちらりと見てから僕に差し出した。手に取つてみると、紙に書かれていたのは不思議な文字だった。神社で貰うお札に似ている。

「真弓くん、また第一発見者になつたの？」

「真弓ならここにいても不自然じゃない。図書室の常連だからそうね、と小百合は深く追求することはなく、周囲に落ちている紙を拾つていった。智哉も同じように拾つていく。

真弓は僕を見て弱く笑い、すぐに視線を根岸に移した。横目で小百合と智哉を見ると、二人は根岸に関心はないようだつた。片膝を着いて、根岸の顔を覗きこんで見た。

「根岸、大丈夫？」

「……私は悪くない……」

一応声を掛けてみたが、応えはなかった。その代わりに、何度も悪くないと繰り返す声は狂気じみていた。ぶつぶつと洗脳するように、暗示をかけるように声は途切れる事はない。

昨日の魔法陣は根岸がやつたことだということはわかつてた。それは教室での会話で確信してた。では、今度は誰がやつた？ 小百合と智哉は紙について何かを話し合つていて、その内容は聞き取れなかつた。聞いたところでわかるとは思えないけど。視線に気付いたのか、智哉は右手に持つた紙を左手の人差し指で指した。

「また間違つてる」

「何かの本を『写したみたいだけど、これは『呪い』の意味でさえない。間違つてているけど、祈祷の一種よ』

たとえそれが間違つて祈祷の意味を持つものでも、相手の趣旨は『呪い』だろう。それがわかっているのか、根岸は小百合の言葉に反応しなかつた。今日自分が言つた「呪いには違いない」というのが自分の身にも起つたのだ。佐藤に言つた言葉が跳ね返つてきて、一体どんな気持ちなのか察することはできない。

そんなもの、知りたくもない。

「嫌な感じだ」

「そう、嫌な流れよ。連鎖するわ。模倣は便乗できて、楽だから」 小百合の意見に頷いた。そう、真似をするのは楽だ。前例があれば、悪い事をしているという自覚が薄れる。「誰かがやつたから」。その魔法の言葉は錯覚を起します。

なぜ、今になつてこんなことになつたのか。藤田先生の蒔いた種はどんなものだつたのか。

「小百合、藤田先生の蒔いた種つていうのは何？」

「『今できる』ことをやれ。今だからできる』ことをやれ』。無責任な言葉よね。なんでも理由にできる」

小百合が吐き捨てるように言ったのに、根岸はびくつと大きく肩を震わせ、口を閉じた。思い当たる節があるのでう。

今できること。高校一年の今できること。高校も一年目になつて学校のしくみもわかつてきただ頃で、受験もまだ先だから一番余裕がある時期だ。そして一番不安定である。思春期で、人間関係にも悩む年頃だ。そんなときに『今だからできる』ことをやれ』と言われば、常日頃思つていることが当てはまるのは自然なことだ。

根岸の場合、それは『友達だが気に食わないところがある佐藤に悪戯をする』だったということなのか。

僕はその言葉をそのままの意味で受け取っていた。後悔しないようになり、夢に向かった今できる』ことをやれ。それが、違つ結論に辿り着くとは。

「良い意味は、同時に悪い意味も含むことがあるのよ。長所と短所なんて、紙一重、解釈の違いだしね」

「小さな親切大きなお世話、ということですか」

真弓は根岸の肩から手を離し、膝を伸ばして立つた。もう根岸を支える必要がなくなつた。根岸はさつきまでの動搖が嘘のように体の震えは止まり、下を向いて何かを考えているようだつた。

根岸のことは放つておいても大丈夫だらう。自業自得だといつてしまえばそれまでだが、もう助けが必要には見えなかつた。

「そろそろかもね

「そうだね」

二人の予測は何を示しているのかわからなかつた。真弓もわからなかつたようで、首を少し傾げていた。その様子に肩を竦めて同意を表した。

やはり勘違いだったのか。一人にとって僕は特別なんて、なんで思つたんだろう。主語も述語もない、端的に何かを示す言葉が理解できない。意思の疎通ができていないのに、思い上がるの~~は~~これまでだ。友達であることは変わりない。

真弓のいつもの優しい瞳に、少し泣きそうになつた。

11・呪いと悪意

朝、教室に入ると、昨日のことはもう知れ渡っていた。僕が教室に着くのは一時間目が始まる十分前なので、生徒は大体来ている。佐藤はまだ一昨日のことを引き摺っているのか、姿が見えなかつた。根岸も佐藤の一の轍を踏むのが嫌だつたのか、空席になつていた。佐藤の様子を見ていれば、自分がどうなるのか容易に想像できる。当事者がいない中、話は盛り上がりついていた。小百合は話に参加する気はないようで、本を読んでいた。その顔は俯いていたが、不機嫌そうな表情が見て取れた。智哉は小百合の横に立つて様子を見ていた。

「真弓、お前また一番に着いたんだってな。お前がやつたんじゃないのか？」

また黒井が無責任なことを言つた。黒井も小百合同様影響力を持つ存在なので、その発言に周りの生徒は反応した。昨日は小百合の方が影響力が強かつたため負けたが、今は違う。真弓に嫌な視線が集まつっていた。

第一発見者が犯人なんて、笑えない。学校でそれをするのはメリットよりデメリットの方が大きすぎる。今回事件が起こつた場所は、どちらも特定するのに時間が掛からない場所だつたのだから、その可能性はもつと低くなる。発見するのは他人の方が簡単だつた。その中で真弓は平然として、いつもと変わらない笑みを浮かべた。打たれ強い。また真弓は被害者で、何かを我慢している。

「真弓がするはずない」

思わず口から出た。言った本人が驚いているのだから、周囲も驚くのは当然だつた。真弓に向かっていた視線は一気に僕に集まつた。黒井はまた邪魔をされたのが気に障つたのか、こちらに向かって歩いてきた。

うわ、威嚇してるよ。でも本当のことだから仕方ないじゃないか。

「何でそんなことが言えるんだ？」真弓は八方美人でいつも他人と線を引いているだろ。もしかしたら、偽善なのかもしない。佐藤や根岸を嫌っていたかもしないだろ！」

「偽善でもそれは優しさだ。そして、真弓はそんな卑怯なことはしない。怖いわけ？ 犯人がわからないことが」

だから誰かを犯人にしたいのか、と言えば胸倉を掴まれた。いいね、その短絡的なところが。そんなことをすれば、不利になるのは黒井の方だ。殴られるのは覚悟の内だ。こんなときに凄まれても、恐怖なんて感じなかつた。周りにいるクラスメイトは理不尽な黒井の行動に戸惑つていていた。

そのとき、凛とした少し高い声が通り抜けた。

「最初に言い出した人が犯人、っていうのもあるよね」

黒井は声のした方へ顔を向けた。言った本人、智哉は小百合の横に立つたまま無表情で黒井を見た。智哉が教室で普通に話すのは珍しかつた。小百合とはよく話しているようだつたがその声は控えめで、はつきりと聞いた者は少ないだろう。

黒井は一瞬怯んだようだつた。それが掴まれたところから伝わつた。

「その手を早く離しなよ。そんなことしてると、本当に犯人だと思われるよ」

黒井は乱暴に手を払つた。掴まれたところの皺を伸ばすために服を軽く払い、智哉を見た。黒井を責める瞳に出逢い一瞬迷つたが、お礼の意味を込めて薄く笑つた。智哉は安心したのか、瞳の強さを少し緩めた。それでも鋭い視線を黒井に向けた。

真弓は自分を庇つたことで矛先が僕に向かつたことを心配していつたようで、黒井が離れてから急いで駆け寄つてきた。

「大丈夫ですか？」

「平気。小百合、今回も解説を頼める？」

僕が攻撃対象になつてからずつこちらに視線を向けていた小百合は、やれやれと言つた様子で立ち上がつた。手には昨日拾つた札

の一枚を持っていた。他の札はどれも同じで、処分してある。

「これは『祈り』を意味するもので、『呪い』の効果はないわ。書いてあるのも間違っているし。でも、相手の意思是『呪い』。昨日と同じね」

小百合の解説に教室にいる全員が耳を傾けていた。そう、また『呪い』だ。昨日は魔法陣で、今度は札。種類は違っていても、どちらも第一印象は『呪い』を思わせるものだった。

黒井は何も言わなかつた。小百合には弱いのだろうか。それにしても、大人し過ぎるような気がする。これは、なんとなくわかつた。黒井は小百合のことが好きなのだ。そして、智哉に対しても素直に従つたところを見ると、小百合と一緒に行動する智哉も一目置かれているということだろう。突然その中に加わつた僕を良く思わないのは仕方のないことだ。僕だって未だに何故一緒にいるのかがわからない。

友達という理由だけが頼りだった。

「一つ言つておくと、『呪い』はそれ自体じゃなくて、その『言葉』が問題なんだ。『呪われている』と思うことが、心理負担になる。そのストレスが、『呪い』の効果として体に変調をきたすんだよ」智哉の説は、納得させるものがあった。現代では、ストレスがもたらす体への影響はよく知られている。胃腸が悪くなるのはその代表だ。自分が『呪われている』と思えば、体に異変が出ても不思議ではない。ただの悪戯でやるには、相手の負担が大きすぎる。

それに手を出したのは、佐藤とあとは誰なんだ。

「黒井、僕も同じなんだ。僕は怖い。悪意が感染しているようで、嫌なんだ」

「弱虫だな。でも、確かにこの流れは嫌な感じだ。卑怯なのが気にくわない」

僕に向かつて嘲るように笑つたが、そのあと苦虫を潰したように舌打ちした。黒井は悪い人間ではなく、皆の代表として態度に出しているような感じがした。皆が思つていてることを曝け出していくような、そんな明け透けな印象がある。だからこそ、支持される部分があるのであらう。

自分が誰にも影響を与えない、小さな人間に思えた。

「『怖い』と認めるのも勇気よ。由宇はそれができるから好きよ」突然小百合がにこっと笑つて言つた。「由宇」と「好き」に、クラスマイトは騒いだ。横目で黒井を見ると、悔しそうにしていた。

何で今言つかな。何か意図があるのはわかるけど。その好きは「友達」に対してなのに、恋愛としてのものだと思われる可能性が高い。

「僕も由宇のことは好きだよ。だから、一緒にいるんだ」

智哉も加わった。これは一人の計画だと確信した。何かを煽つている。

それに顕著に反応した教室にいた生徒は沈黙して、僕に不躾な視線を向けた。

嫌だけど、だんだん慣れてきた。一人と友達になるのに、それくらいの覚悟はしていた。

「何をしているのですか。もうチャイムは鳴りましたよ」

担任の声が静けさを割つた。女性特有の高い声ではなく、硬い声だった。真弓と同じ丁寧語なのに、使う人によつてそれは全く違つて聞こえた。

「真弓の方が自然だつた。

「また呪いの悪戯があつたようです。魔法陣、札と続きましたが、真似しないでください。では、授業を始めます」

担任が教科書を教卓の上に広げたのを合図に、クラスメイト達は自分の席に戻つていった。教師には従順なクラスだった。反抗する者はこの場にいない。そういうグループは屋上でさぼっていることだろう。その方が賢い。教師相手に反抗しても体力の無駄遣いで、そんなことをするくらいなら大元から離れればいいだけのことだ。それは教師を馬鹿にしていることにもなるけど。

「では、今日は源氏物語に入ります」

硬い声に変化はなく、無機質な感じがして嫌だつた。クラスの生徒が被害に遭つていて、それを何事もなかつたようにしている。悪戯で済ませないほどの悪質なものなのに、他の教師も何も言わないのか。さつきから一つ引っ掛けていることがある。何故二つの呪いの種類を言うのか。ただの『呪い』で充分なのに、特定する意味はどこにあるのか。

授業は自習していたらわかる内容なので、意識を外に飛ばした。ふと視線を感じて顔を上げると、同じように授業に集中していない小百合と目が合つた。苦笑を返すと、小百合は困つたように笑つた。やはりこの反応は変だ。智哉の方を見るとこちらを見ていたようで視線が交わつた。小百合同様苦笑をすると、智哉はあからさまに目を逸らした。

これは疑いようもなく、僕の笑顔は一人にとって見たくないものいうことがわかつた。これから気をつけよう。変な顔になつているのかも知れない。

隣の席の真弓を見ると、僕の視線に気がついたのか、真弓がこちらを見た。試しに笑顔を作ると、真弓も笑みを返した。これが友達の普通の反応だろう。

小百合と智哉と本当に友達になつたと思っているのは、僕だけなのか。『友達になりたい』と言つたのは向こうだけど、冗談だつた

のかもしない。名前で呼び合つのも、違つ意味があつてのことな
のか。

自問自答に最終的な答えはなかつた。

「約束通り、作ってきたけど」

結局、疑念はそのまで昼を迎えた。昨日と同じ配置で座つてい
る。中華料理ということだが、装丁は全く気にせずタッパーに入れ
て来た。

全部で三つの容器を袋から取り出すと、小百合と智哉は早速蓋を開けた。

「わー春巻きが両方ある」

「どっちでもいいって言ったから、どっちも作つてみた」

プラスチックの皿を一枚ずつ渡し、箸はそれぞれ持参で用意は整
つた。手を合わせての「いただきます」の声は自然と重なり、昨日
と同じように昼食は始まった。

中華料理は弟が好きなので、和食を得意とする母に代わつていつ
も作つっていた。週に一回のペースで作るため、腕は着実に上がつ
いる。実は今日持つてきたのは昨日作ったものだつた。四人家族な
ので、あと三人分を追加しても支障はない。

「うわー美味しい。生春巻きは勿論のことだけど、揚げた方も良い
わ」

「チャーハンはあんかけにしたんだね。確かに、お弁当にするどご
飯がベタつくからこっちの方がいいけど」

話しながらも口に運んでいく一人に、自然と笑みが零れた。自分
が作ったものを喜んで食べてもらえれば本望だ。そのために弟の我
が儘で作つてあげていると言つても過言ではない。

二人は僕の顔を見て、一瞬動きを止めた。動かしていた口と箸が
静止した。

これは僕の笑顔のせいだ。

「あーもしかして、僕の笑顔は嫌い？」

「いや、そうじゃないの。笑っている顔が嫌いなんて、そんなん無

いもの。ただね」

小百合は言葉を濁した。笑顔を嫌だといつことではないことがわかつたが、続く言葉が気になる。

もぐもぐと口を動かして沈黙した小百合は困った様子で、智哉に助けを求める視線を送った。智哉は口に残っていたのもを飲み込んで、溜息を吐いた。

「君が笑うのは珍しいから、驚いただけ。嫌いじゃないよ、君の笑顔は」

「じゃあ、気にしないことにする」

そう宣言すると、二人は頷いた。嫌われていなかつたという事実に安心した。なんとなくなつた友達という関係が、今では失い難いものになつていた。一人でいるのは楽だけど、小百合と智哉なら一緒にいるのも悪くない。嫌な視線が付き纏うけど、そんなことは気にならない。

小学生時代の給食のように、会話のある昼食は穏やかに進んでいつた。

「今日は用事があつて一緒に帰れないの。『ごめんね』
「…」「苦労様」

両手を腰に当てて深く溜息を吐いた小百合に心底同情した。また担任から雑用を押し付けられたのだろう。優等生を演じているから、やらないでいいことまで任せられる。智哉も同様に机の上に紙の束を積んでいた。

「手伝おうか?」

「いや、いいよ。これだけが用事じゃないから
他にも何かあるのか。手伝いを拒む理由は言いたくないようだつたので、訊かないことにした。

前まで一人で帰っていたのに、今はそれが不自然になつていた。数日で大きく変わった環境。それは急激すぎたのかもしれない。
無意識に救いを求めていたのかも知れない。

「すっかり綺麗になつて…」

足は自然と最初の事件が起つた場所へと向かっていた。あの禍々しい赤は跡形もなく消えていた。血は消えにくいのだから、その労力に少し同情した。あんなことがあつた場所だけど、それでも僕にとつては安心できる場所だ。あの赤は、呪いではない。あれは智哉が言つていた、心理負担のための手段だ。この場所はまだ僕のものだ。誰もいないことが一層心を落ち着かせた。

いつもと同じように、溜め込んだモノを発散するように大きく声を出した。放送部の发声練習にでも聞こえているのだろうか、と小百合が言つていた言葉が過ぎた。どんな風に聞こえるか試してみたいと思う。また機会が試してみよう。

久しぶりに出した声は思つたよりも伸びた。高音が自然と出る。

腹筋を鍛えて出した腹式呼吸の声は、無意識の内にアメージング・グレイスを紡いでいた。何度も歌つた旋律が喉の奥を震わす。何かを吹つ切るよう歌つていた僕は、近くに人がいるなんて思いもしなかった。しかも、それが複数だったなんて。
でも、それはいつものことだと、後から真弓と小百合と智哉から聞いた。

いつもの帰り道。いつもの光景。過ぎていく景色の中には人の姿はない。

駅を過ぎるとそこは工場や大きな会社が並んでいて、少し歩いたところに住宅街が広がっていた。駅付近は学校側が栄えていて、有名なデパートやアーケード街がある。人気のない道は、あと五分ほど続く。

建物が並んでいるため、死角が多い。突然人が現れたように見えたのは、角から出てきたからだった。現れたのは、クラスメイトの志水だった。

「何か用？」

「お前さえいなければ、一人は調和していたんだ。なんでお前があの二人と一緒にいるんだ！」

小百合か智哉の信望者か。確かに二人は並んではいるとお似合いだつた。それをうつとりと見ている奴がいるのは知っていた。害はないようだつたので放つておいたが、それがこんな形で影響するとは思わなかつた。

志水が怒るのもわかる。僕が入れば二人の関係は可笑しくなる。それは表面上だけのことだが、表面しか見ていない信望者には言つても無駄だつた。志水は名前順が智哉の前に位置するため、その思いは強いのだと察する。

「それは友達になろうって言われたから」

「あの人たちが？　冗談だろう。真に受けたのか？」

鼻で笑われた。一人が僕なんかを相手にしないと思つていてがその蔑んだ目から痛いほどわかつた。

僕だってそう思つたことはある。何故、という疑問は常にあつた。でも二人と一緒にいると、そんなことは考えられなくなつていた。二人は僕を認めている。

「僕は小百合と智哉の言葉を信じる」

「名前で呼ぶな！ お前が呼んでいい名前じゃない！ わからないんだつたら、わからせてやるしかないな」

志水は学生服のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。刃が怪しく光る。魔法陣事件があつたときの帰り道、小百合が言つていたことを思い出した。西洋での魔女識別方法として、火やナイフがあつたそうだ。火に手を入れて火傷をしたら魔女、ナイフで身体を刺して、刺されば魔女。悪しき者が傷付く識別方法だつたらしいが、そんなもの普通の人人がやつたら火傷もするしナイフは刺さる聖火なんて、結局はただの火だ。

その魔女識別方法が、今自分を試すために行われる。

「今しかできないことをやる。僕のアイデンティティを守るために」

どこかで聞いた言葉だつた。向かってくる刃を見て思い出した。それは藤田先生の言つた種の中になつたものだ。そう考えている間にも、刃は確実に僕に向かっていた。どこを刺すつもりだろう、とぼんやり考えていると、背後から人影が過ぎつた。長い髪がふつと頬に当たつた。

「小百合」

僕の前に立つて志水と対峙したのは小百合だつた。不思議と一瞬で人物の正体がわかつた。

志水は小百合の登場に驚いたようだつたが、勢いのついたナイフの動きは止められなかつた。刃は小百合に向かう。

小百合は自ら前に進んでいった。後ろからはよくわからなかつたが、刃を瞬時にかわしたようだつた。体を少し傾け、翻りながら志水の腕を掴んでナイフを叩き落した。ナイフが地面に当たつて硬質な音がした。

「それはアイデンティティーじゃなくて、エゴよ」

小百合は志水の横に立つて、冷たく言い放つた。美人が怒ると通常よりも何倍も怖いというのは本当だつた。志水は近くでその小百

合を見ているため、その怖さは僕よりも大きいだろう。

智哉も僕の背後から現れ、地面に落ちたナイフを拾つた。

「正しいことをした君なら、このナイフは刺さらないんだよね？」

智哉はくすくと楽しそうに笑つた。ナイフをくるくると器用に回している。

「一人とも、本当に怖いんですけど。

「もう、止めたら。もうどうでも良くなつた」

「優しい由宇に免じて、これくらいで許してあげるわ」

「そうだね」

小百合はふっと気を緩めて笑い、智哉は息を吐いた。ナイフは折りたたんで放物線を描いて志水に投げた。志水はそれに反応できずに、ナイフは地面に落ちた。

歩み寄つてくる小百合に、僕は手を伸ばした。小百合は意味がわからないようで、首を傾げた。

「あ、何か可愛いかもしれない。これが信望者が付く所以か。

「有難う、小百合。助かった」

感謝に意図するところを理解したのか、小百合は僕の手を取つた。女性特有の柔らかい手。それは優しく重なり合つた。これなら恋でも芽生えそうだった。でも、それはない。僕の中で小百合は友達の位置に確固としている。

穏やかな空気が流れる中、智哉は足早に近寄つてきて、手刀で握手を断ち切つた。

「…小百合」

「良いじゃない。今回働いたのは私なんだから」

また一人でわかりあつてゐる。智哉のこの行動は、嫉妬からきたものなのは間違いない。

やはり、二人は付き合つてゐるのか。それとも、片思いの両思い状態なのか。なんか、微笑ましい。こういうじやれ合いを見ていると、無意識に表情が緩んでいた。言い合つていた二人は、僕の顔を見て困つたように笑つた。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか」

小百合は面倒臭そうに首の後ろに手を掛けた。智哉も同意を示して腕を組んで頷いた。

何が始まって、何が終わるのか。二人は知っていた。

次の日は土曜だったが、午前中は模試のため登校していた。佐藤も根岸も来ていた。進学のため、模試を放棄する気はなかったのだろう。全ての教科が終わつた今、ホームルームを残すのみだ。しかし、それはまだ始まつていない。小百合がいなかつた。

「諏訪さんはどこに行きましたか？」

「すぐに戻つてきます」

智哉は即答した。担任はそれ以上何も言わず、待つ姿勢を取つた。クラスメイトも智哉の答えを素直に受け止めていた。説得力があるのには違ひない。

智哉も言葉通り、小百合は一分もしない内に戻つてきた。堂々と、前のドアからの登場だつた。そして後ろに藤田先生を引き連れていた。

何をやろうとしているんだ。

「諏訪さん…藤田先生はどうしてここに？」

「諏訪に呼ばれたんだ」

状況がわかつていらない教師二人は小百合に答えを求めた。小百合はにっこりと笑つて藤田先生を担任の横へと導いた。

そして、後ろ手でドアを閉めた。教室は完全に閉ざされた。

「もう面倒なんで、終わらせたいんです」

「何を終わらせるのですか？」

担任の素朴な疑問は、黒板にチョークが当たる音に消えた。小百合は黙々と黒板に何かを描いていた。それはあの魔法陣だつた。小百合が黒板に向かっている間に、智哉は小百合の横に立つた。静かに教壇へと進む智哉に気付いた生徒はいないようだつた。僕も全然気が付かなかつた。教師二人は小百合たちが何をしたいのかが理解できないようで、じつと見ているだけだつた。それが描き終わると、次に智哉が札に書かれていた不思議な文字を書いた。描き終わつた

のか、チョークを溝に置いて二人は振り返った。

二つを並べると、それは『呪い』の印象しか持たなかつた。

「初めは魔法陣。これは『呪術』の一種よ。でも、ここが間違つてる」

カツカツ、と人差し指の第二関節で示した。何が間違つているのかわからない。

大半が理解できていない中、小百合は淡々と説明した。

「わからなくていいの。ただ、呪いは間違うと呪つた本人に戻つてくるの。『人を呪わば穴二つ』とはよく言つたものね。まあ、呪いの本質は『言葉』なんだけど」

それは前に智哉が言つたことだ。「呪われている」ということが、何らかの効果として表れる。

呪いが返つてくるということなら、佐藤に対して行つた間違つた呪術は本人に戻るということになる。確かにその犯人の根岸は札によつて呪われた。

何か、話が上手く行き過ぎていなか？ それに、返ってきた呪いの形が違つている。

「根岸は呪いが返つてくることを知らなかつたんじゃないのか？」
小百合に集まつていた視線が一斉に僕の方へと向いた。当然の疑問だろう。良く出来ました、とばかりに小百合は笑い、黒板を軽く叩いて注目を集めた。

「札の犯人が、それを知つていたのよ。それを利用したとも言える。魔法陣を根岸さんが描いたのは、わかる人にはわかつたはずよ。札も間違つていたんだけど、これはただ嫌な流れを作ろうとしただけだから構わないの。この呪いは、根岸さんに影響すればそれで良かつたから」

小百合によつて、この一連の事件が解かれていく。佐藤と根岸は呪いの仕組みがわかり、安心したようだつた。この中で、不自然に緊張しているのは犯人だけだ。

犯人だけのはずなのに、何故複数いるんだ？

「そこで、早く終わらせたかったから、私は種を蒔いたの」

小百合が尋いた種。あのときの小百合の発言を思い返すと、それははつきりとわかつた。あのときに何故言つたのかわからなかつたが、今ならわかる。

「『由宇が好き』。僕のことを庇つたときか」

「正解。そしてそれは上手くいったわ。昨日由宇を襲つた犯人が、札の犯人もある」

小百合は糾弾するように、志水を指差した。皆の視線は志水に集まつた。志水は顔を下に向け、微かに震えていた。少し可哀想だつたが、やつたことを考えればこれくらいは仕方ないだろう。「私と智哉の中に由宇が入つたことを良く思わない人がいるのは知つていたわ。だから、良い機会だと思って利用させてもらったの」だから、誘き寄せるために僕を一人で帰らせたのか。あんなに良いタイミングで現れたところを見れば、ずっと後ろをつけていたのだろう。用意周到だ。しかし、一人は僕に嘔は吐いていない。あの紙の束は本当だと不思議と確信できた。どちらかが僕の後をつけて、一人で処理するなんて流石とも言つべきか。

最後の犯人を指摘してこれで終わりだと思った。しかし、小百合は終幕を宣言していない。

「ここ」で余談だけど、由宇を私と智哉と同じ位置に見てている人もいるのよ。佐藤さん、あなたもそうよね？」

佐藤は突然呼ばれて驚いていたが、すぐに頷いた。小百合が理由を無言で促すのに気付いたのか、戸惑いながらもはつきりと口を開いた。

「須賀くん、歌が上手いから。あの最初の事件の場所で歌つているのを聞いたの」

恥ずかしい。認められているのは嬉しかつたが、それでも恥ずかしさが上回つた。あのストレス発散の行動が、小百合と智哉の位置

にまで押し上げていたとは。歌の上手さなんて自分ではわからない。どんな声なのかわからないし、比較がなければ評価なんてできない。

あのとき、小百合と真弓が僕ならわからないかも、と言った理由がやつとわかった。余談、ということから僕のために小百合は話したのだろう。優しい声は、一瞬にして切り替わった。何者も寄せ付けない、冷たい声が教室に通る。

「さて、根岸さんと志水くんの仕業だということはわかつたわね。じゃあ、何故今になつてこんなことをしたのか。何が原因になつたのか」

何故今になつて。今だから? 今だからやつたのか。その言葉は何度か聞いたことがあった。

今できることをやれ。それを根岸と志水は大義名分のように言つていなかつたか。では、それを初めに言つたのは。

「先生方ですよね。この騒ぎを引き起こしたのは」

小百合は疑問形ではなく言い切つた。その強い口調に、教師二人は明らかに動搖した。さきほど志水と同じく不自然に緊張していたのはこの一人だった。騒ぎを引き起こした張本人だから、あんな反応をしたのか。

藤田先生が種を蒔いた。小百合は確かにそう言つていた。そういう意味だつたのか。

「何を言つてゐるんだ。俺が何をしたつていうんだ」

「『今だからできることをやれ。自分のアイデンティティを守れ』。これだけ聞くと、綺麗なものですよね。でも、それは裏を返せば正当化の言い訳です。悪いことをする後押しになる」

藤田先生の語氣の強い声を飄々とかわし、小百合は調子を変えずに淡々と述べた。その反論に、藤田先生は口を噤んだ。それは意図して言つたことを肯定することになつた。

あの言葉に深い意味はないと思っていた。だから、引っ掛かることがなかつた。しかし、精神が不安定な人が聞けば、それは呪文のように聞こえるだろう。その効果は根岸と志水で嫌というほどわか

つた。そして、それを煽ったのは担任の朝の報告だ。曖昧に情報を流して不安を誘う。邪心のあるものはそれに乗っかろうとする。今だからこそわかる、全ての意味ある行動。

何故、この教師一人はそんなことをしたんだ。

「何故こんなことをしたんですか？　佐藤と真弓を犠牲にして。教師であるのにもかかわらず」

「あなた達は本当に私を教師と認めているのですか？　いつも馬鹿にしていたのに、そんなことが言えるのですか？」

僕の問いに、担任は冷静に答えた。声はいつもより硬かつた。生徒が教師を馬鹿にした。それに対する行動がこれというわけか。頭が痛くなってきた。正当化することに慣れている人ばかりだ。佐藤のことはわからないが、関係ない真弓を巻き込んで、何を正当化できるのか。

自分が正しいなんて、それは主観じや駄目だ。客観的な評価じゃないと、それはただの自己満足だ。

「それは自己満足だ…」

「そうだね。由宇の言つとおり、皆正当化の自己満足だよ。僕は誰も馬鹿になんてしない。そして、誰も利用しようとは思わない」「ふと漏れた咳きに智哉は同意した。それに救われた。偽善だと思われてもいい。ただ一人でも味方がいればそれで良かつた。僕は担任も、藤田先生も馬鹿になんてしていない。客観と主觀が同じだなんて、そんなことばかりじゃない。態度が全て内心を表しているわけじゃないのに。」

今回小百合と智哉が利用しようとしたのは、状況だ。人を利用してはいけない。その差は大きい。生徒を利用した教師。それで起こったことを利用した小百合と智哉。結局二人はいつかは起こることを早めただけで、それは相手をも救っていた。

何が正しいかなんて、明確な答えなんてない。ただ、悪いことだけは嫌でも浮き彫りになる。

もうこの場にいたくなかった。こんな空氣の中で、正常な思考が保てるとは思わなかつた。段々と混乱しているのが自分でもわかる。

人がこんなにも汚いものだとは思いたくなかった。負の感情が悪を呼ぶ。皆が皆そうだと思いそうになる。そして、自分をも疑いそうになる。

「ただ僕は、藤田先生の言葉を励ましたと思いたい。小百合と智哉の友達でいたい。自分が傷付いたからって人を傷つけて良いはずがないんだ。月曜にはちゃんと学校に来ますから、もう帰つてもいいですか？」

口から心の声が漏れた。声は擦れていて感情が籠つていなかつた。叫びたい衝動が身体を支配しそうになるが、ここでそれをして何も伝わらないだろう。それくらいの予想はつく。脈絡のない言葉が続き、最後は担任に向けて言つた。情けない顔をしているだろう。自分では確かめられないが、担任の無言の領きがそれを肯定した。誰も何も言わなかつた。真弓が心配そうに見ているのに、力無い笑みを返した。もう、疲れた。それが伝わつたようで、夏田は労わるような笑みを浮かべた。

小百合と智哉は無表情で見ていた。

後は任せた、と頸を引くと、小百合は微妙な笑みを浮かべ、智哉は眉を寄せた。

教室のドアを閉めるとき、背後から小百合の声が聞こえた。
「信頼を裏切る。その結果がわかりましたか？」

涙が出るかな、と思つた。でも出たのは溜息だけだつた。人の悪意を目の当たりにするとそれが他人に向かつてのものであつても苦しくなる。自分に問題があるのでないかと、自分を責める。いつもの逃げ場である家の近くの公園は、休日を楽しむ親子で賑わっていた。それに少し救われる。ベンチに座つて頃垂れていると、地面に影が差した。

「有難う。小百合、智哉」

「どういたしまして。由宇、大丈夫？」

小百合の声は優しかつた。思わず縋りたくなる。しかし、それはできなかつた。それは本当の逃げになる。そんなことで二人を必要としたくなかった。

顔を上げると、僕を心配する一対の瞳に遭遇つた。その瞳にふつと気が抜けた。知らない内に気が張つていたようだ。

「もう大丈夫。君たちがいて良かつた」

ちゃんと穏やかな笑みを作れたはずだ。だつて、こんなにも気持ちが穏やかなのだから。その証拠に小百合は嬉しそうに笑い、智哉は照れたように口元を緩めた。

僕が教室を出てここに来てから数分しか経つていないけど、小百合はどうやって終わらせたのか気になつた。收拾はついたのだろうか。

それを察したのか、小百合は笑顔のままで言つた。

「先生たちは全てを認めて謝つたわ。そして皆はなんとか気持ちに決着をつけたみたい。すぐに解散したわ。由宇の言葉が導いた結果よ」

それは買いかぶりだ。僕は逃げた。あの場から逃げても何も変わらないのに、あの場にいるのは耐えられなかつた。

もつと感情をぶつけていれば楽になれたのかと思つてみても、そ

れは混乱を招く恐れもあった。これは黒井の言つ弱さだ。

「由宇は優しいから辛いんだよ。それに比べて僕たちはそこまで優しくなれないから、ある程度のところでは諦めがつくんだ」

智哉の柔らかい声に、思わず手を伸ばしてしまった。それは自覚して引っ込める前に智哉に捕えられた。手から伝わる優しい温度。もう、無理をする必要なんてない。そう、心から思えた。

前に智哉がやつたように、小百合は繋いだ手を切り離すつもりはないようだった。

「あの花弁の意味、わかった？」

小百合から何の前振りもなく発せられた問いに、思い当たるもの是一つしかなかった。僕を囮むように一面に散りばめられた赤い花弁。あの禍々しさは、今回の出来事を表すのにぴったりだった。未来を確信していた小百合からのヒントといふことだろうか。

「意味があつたんだ？」

「まあね。花弁を片付けるの、大変だったでしょ？　出すのは簡単で、消すのは難しい」

「…そうだね。言葉は発してしまうとなかつたことにはできない。そして、悪意を消すのは難しい」

思い出したくなかった。あの悪意に満ちた空間。濃密な日々が続いたのが、知らない内にかなりの負担になっていたようだ。赤が目にならつぐ。そういうえば、あの花の量は異常だった。花束が作れる程の花を何処から手に入れたのだろう。

買ったとは考えにくい。すると、考えられるのはただ一つ。

「あの花は誰から貰つた？」

「やっぱり貰い物つてわかるわよね。あれは自称ファンクラブ会員から。ちなみに薔薇よ」

「貰い物をばら撒いたんだ…」

小百合はただ笑みを浮かべただけだった。酷いことをする、と思つてみても、気持ちの押し付けに丁寧な対応をする必要性はなかつた。最後にはゴミ箱行きになった花弁。それに込められていたもの

は何か。善意なのか悪意なのか。

悪意を発散させる方法なんてあるのだろうか。

「そういうえば、なんで由宇はよく放課後、教室で寝ているのさ？」

少しは気になっていたということとかな。智哉の疑問はあのとき言われなくて不安になつたものだった。気にしていくれたといつことが、今は嬉しかった。

「解放、かな。この自由を縛る学校、教室で寝るといつ行為は反則だよね。だからこそ、その反則行為で身体の中に溜め込んだ悪意が発散される気がするんだ」

「授業中に寝るなんてことができないから、ね。由宇らしいわ」

そう、授業中に寝ることなんてできるはずがない。それを見た教師に悪意が湧くのは自然のことだ。今回の事件の教師を見ていたらそれはわかる。その悪意を受けるくらいなら、眠気を我慢する方が楽だ。

今回のこととは教師一人が起こしたことだが、最後の事件は普通ならなかつたものだ。友達にさえならなければ。そこまでして僕を引き入れた理由が、本当に恋人のカムフラージュということだけなんか。

「君たちって付き合つてるんだよね？」

「…何言つてゐるのさ」

智哉が呆れたように顔を顰めた。かなり的外れな答えたたらしい。じゃあ、リスクに見合つうものは何なんだ。

「もしかして、私たちが付き合つているのをカムフラージュするために由宇を引き入れたと思つてたの？」

「そう」

あからさまに失敗した、という顔をした小百合は智哉を見た。智哉は小百合の言いたいことがわかつたのか、ただ頷いただけだった。何が「一人の間でわかつたんだ？」

今までの状況だと、それ以外の結論は導けない。

「これも良い機会かもしれないわね。由宇、ちゃんと聞いてね」

小百合が真剣な表情に変えたのを合図に、智哉は繋いでいた手を離した。今までずっと手を繋いでいたのに気が付かなかつた。それほど自然になつていて。温もりがなくなり、手持ち無沙汰になつた手を握つたり開いたりして紛らわせた。

「私は由宇が好きなの」

「僕は由宇が好きだよ」

続けてされた告白に、思考が固まつた。その台詞は前に聞いたことがあつたが、それとは違うことはわかる。

僕が何かを言わない限り、嫌な沈黙は続く。周りの明るい声が遠くに聞こえた。何を言えばいいのかわからず、とりあえず確かめた。「それって、恋愛感情つてこと？」

二人は揃つて頷いた。偏見ではないが、智哉が僕を好きだというのに戸惑つた。小百合が僕のこと好きだというのも、充分に混乱するものだつたが。

「僕とキスしたい、そういう好き?」

また二人は揃つて頷いた。

友情さえ疑つたのに、それが本当は恋愛感情だつたなんて。信じるけど、実感できない。でも、今までの二人の行動に説明がついた。僕の笑顔に変な反応をしたのは照れ隠しで、今回の事件を利用して僕を仲間に引き入れたのは一緒にいるきつかけを作るため。そんな特別な理由があるなんて、思いもしなかつた。裏付けの行動は、その気持ちが本当であること以外は示していない。

「悪いんだけど、今返事はできない。まずはお友達から、といふこと

で」

「うん、わかつてゐるわ。だから、友達から始めたのよ」

智哉も頷くのを見て、ほっとした。答えを延ばしただけで、何も変わつていない。しかし、新しい何かが始まるような気がした。まづは友達から。ゆっくりと知つていこう。今は一人が僕のどこを好きになつたのかわからないけど、それも追々わかるはずだ。あの赤に沈んだときから、未来予想図は描かれていた。

「『愛の告白』。初めからしていたんだけどね」

赤い薔薇の花言葉は『愛の告白』。なんだ、一人の気持ちはもう表されていたのか。それも、貴い物の花での告白。鮮やかな赤は禍々しさを感じたが、それ以外にただ純粋に綺麗に見えた。僕の気の抜けた笑みに、二人は偽らない笑顔を返した。

Hピローグ・数日後

紅に沈んだ言葉は、蒼く染まって歌になつた。

「二人は『あの事件』を利用したんですか？」

夏目が加わって四人になつた昼食会で、夏目は世間話をする調子で切り出した。

『あの事件』とは、先週起きた通称『呪い事件』のことだと察しがつく。

責めるわけではない確認するだけの質問だったので、小百合作のオムライスを食べながら一人の返事を待つた。僕も気にはなつていたことだ。

『『事件』をきつかけにはしたよ』

「由宇と夏目くんを巻き込むつもりはなかつたの。ただ関わつてほしかつただけ」

二人は平然と振る舞つていたが、スプーンを握る手が白かつた。手に力を入れすぎている。

悔やむことないのに。小百合と智哉は悪くない。あの事件に巻き込まれたからこそ、今こうしていられた。

「もう、由宇が傷付くのは嫌だったの」

「そうやって絆を作ろうなんて思つてなかつたのに」

「傷付いて強まる絆。それは、あの事件に似ていた。」

去年の四月、入学式から始まり文化祭で終わつた、あの事件。僕が『万屋』という部活に入つたことによつて生じた不和がきっかけだつた。自分のために人を傷つけることを躊躇わない。正当化した自己満足を理由にする。『みんなも思つてること』で正義を主張する。

今回の『呪い事件』はあの『万屋事件』に似すぎていた。

『『万屋事件』と同じにしたくなかったってこと?』

「そうだよ。君は悪くないのに、君が一番傷つくな

智哉のスプーンを握る手が、一層白くなつた。傷ついているのは誰なのか。僕だけじゃなかつたのは確かだ。

去年は万屋の先輩たちが、今回は智哉たちが。

「仲良くなりたかったっていう理由が始まりなら、それでいいんじゃない？」

『万屋事件』と違つて、今回の事件は営利性がなかつた。『万屋事件』で僕はスケープゴートで、ただ万屋の中で狙いやすかつたという理由だけだつた。

今回の引き金は『アイデンティティ』という理由にならない言い訳で。

「今回の事件がなくとも、このメンバーでいるためには何かが起つたと思うし」

「それでも、由宇が傷つく理由にはなりませんよね」

夏目のため息に苦笑した。

あの事件を利用しようつときつかけにしようつと、今幸せならそれで良い。ただ、そう思つ。

紅から始まつた繫がりが、今では、ふと、歌詞が頭を過ぎつた。

「『蒼い物語』って知ってる？」

話題転換を試みた。これで有耶無耶になるわけではない。智哉も小百合も夏田も、そんなに単純じやない。

話題転換は、ちゃんと今の話に繫がるようになつてこむ。

「佐倉七海の新曲の？」

「そう。『佐倉七海』、本名『名波咲良』は中学からの友達なんだ。中学で唯一の友達、親友だよ」

誰かに中学の話をするのは初めてだつた。咲良の話は簡単にできるものじゃない。『芸能人』と『友達』というのは利用価値になる。そんなことで咲良との仲を壊したくないし、どちらも不快になるのは嫌だつた。

でも、この三人なら、思つたとおり、特に『佐倉七海』に反応し

なかつた。

「咲良の話はまた今度するとして。僕の歌声が好きだつていう咲良のためにレコーディングの手伝いとかしてるんだけどね。今回の新曲は咲良が作詞したのは知ってる?」

それは話題になつてゐるため、知つていて当然かもしれない。三

人が頷いたのを見て、話を続けた。

「あの歌詞は、今回の事件を基にしてるんだ。僕が話した内容を、僕と咲良との出逢いを絡ませて表現したらしいよ」

三人の驚いた顔に、思わず笑みが漏れた。

気持ちはわかる。咲良からそのことを聞いたとき、僕も同じ顔をしていただろう。

あの歌詞が、まさか僕を示していたなんて。

「確かに始まりは『瞼に触れた花弁は唇のよう』で、僕は紅の花弁に沈んでた『だつたわよね?』

「うん。それは始まりだったよね。小百合と智哉と友達になつた日から、始まつた」

あの花弁の中で、僕たちは始まつた。

「次は『意図と糸が絡み合い、僕は試されていた』だよね」

「そう。あの惡意の連鎖は、まるで僕を試しているかのよつだつた」

『呪い』という形の惡意は連鎖した。それは意図、自我を守るという理由で、人を傷つけていた。最後に僕も対象になり、あれは試されていたと表現しても間違つていない。

「『そのすべては今ある幸せのため、たどり着くための条件』、でしたよね」

「正解。みんなよく覚えてたね。その続きは『紅い言葉は告白、それは始まりの合図。今では蒼く染まり、澄んだ空に溶けた。出逢えたのは運命だと、そう思える君との奇跡の軌跡』」

静まり返つた教室に声が響いた。いつの間に静かになつていたのか。歌い慣れた曲であつたこともあり、歌詞を単純に読み上げることができず歌つてしまつた。

「久しぶりに聴いたね、須賀くんの歌」

「去年の文化祭以来だよー」

近くにいた女子グループに拍手された。なんか照れる。家族や友人以外がいるところで歌うのは久しぶりだった。確かに去年の文化祭でステージの上で歌つたが、恥ずかしいのは変わらない。パチパチと、クラスメイトの半数が拍手していた。

「…ありがとう」

一応礼を言つと、好意的なクラスメイトは笑顔で手を振り、雑談を再開した。

一部の好意的じやないクラスメイトは睨んでいた。別に目立たなくてやつたわけじやないんだけど。

「で、これが咲良が感じた『今回の事件』。僕も咲良と同意見だよ。誰も後悔しなくていい。全ては今の幸せのための軌跡だと思えるから」

あのときこうしていたら。その仮定は無意味だ。もし、なんてない。今が絶対で、確定している。

「一番の歌詞は僕と咲良の出逢いだから、それはまた今度『紅から始まって蒼になつたから、『蒼い物語』ですね。今では『あの事件』がきつかけで良かつたと思います」

夏目のかわいらしい笑顔に、智哉と小百合は笑みを返した。

紅に沈んだ言葉は蒼い歌になり、僕たちは幸せになつた。

『呪い事件』の本当の終結が一年後だとは、このときわかるはずもなかつた。

Hペローゲ・数日後（後書き）

一年後は『最後の最後に逢つづ運命』で、『万屋事件』は一年前の『さよならの言葉』の事件のことです。名波咲良と由宇の出会いについては『言葉の欠片を集めて』で公開しています。

やハ | ハの世界に続く話（前書き）

この話にもう一つ要素が加わった話のダイジェストです。『さよならの言葉』の一宣学者が出てきます。

もう一つの世界に続く話

もう一つのパラレル世界。それは「もしも」の話で、案外真実はこっちだつたりするのかも。

「『障害と劣等感は似ている』。『今できる』ことをやれ。それがきっかけよ」

小百合の言葉が耳に残った。それは数時間前に聞いた台詞だった。二つは負の要素としては同じだけど、障害と劣等感は全く違うものだ。似ていない。

今できることをやるとしたら、周りに迷惑をかけない程度にするべきだ。周りに迷惑かけるなら、それはただの自己満足で。

言葉が都合良く解釈されていく。理由にできないのに、自信満々で理由だと言う。悪循環が、広がる。

「一年前に俺たちが鎮静化させた事件が再発している」

学人先輩の介入が、事件を一つにまとめた。

一年前に廃部になつた部活、環境整備部。通称『万屋』は、まだ強い影響を持つていた。まだ続いている、先輩たちへの尊敬。まだ終わらない、僕への羨望と憎悪。「なんでみんな認められないんだろうな」

「努力したくないからです。だから、努力して成功した人を見たくないんです」

僕を認めている先生と先輩。周りからは隠れた努力は卑怯だと言われ、努力で身についたものは嫌がられた。

認めてほしいなんて思っていない。認めてくれた人がいればそれでいい。努力は自己満足だけど、誰にも迷惑をかけていない。

全部初めから持つていなければならないなら、才能しか認められないということになる。そんな価値観、いつまでも通用すると思っているのか。

「その結果がこれです」

最後は何も変わらない結末だった。

まつ一つの世界に続く話（後書き）

この話は後日投稿します。

おまけ（名波咲良）

「初めまして、名波咲良です」
爽やかな笑顔に、三人は同じ笑顔で返した。

「うわ、嘘臭い…」

思わず眩いたのに対し、それぞれ違う反応を示した。
小百合はうふふと含み笑いに変え、智哉は無表情に戻った。夏目
は苦笑し、咲良は楽しそうに笑った。

「さつすが由宇の友達。人気アイドル『佐倉七海』を田の前にして
この反応。ちょっと傷付くなー」

「キヤー佐倉七海！ サインしてー！ って言えば良かった？」

「それは勘弁。諏訪小百合さん？」

咲良は手を差し出し、小百合は力強く握手に応えた。
この一人は似ているかもしれない。自分の姿勢を自覚して、それ
に対する評価を知っている。そして、時と場合によって性格を演じ
分けることができる。

同じタイミングで手を放し、パンツと手を合わせて離れた。

「前からファンでした、とか」

「それは冗談？ それとも本気？ 周防智哉くん？」

「冗談半分本気半分」

咲良は智哉と軽く握手し、僕の隣に立つて様子を見ていた夏目の
前に移動した。

「初めまして。よろしくお願ひします」

「こちらこそ。真弓夏目くん」

お辞儀をした夏目に、同じようにお辞儀で返した咲良はにっこり
と笑った。

作り物ではない笑顔と行動に、咲良が小百合たちを気に入つたこ
とがわかつた。

中学の友達が、新しく高校でできた友達と仲良くなる。単純に嬉しかった。こうやって、人が繋がつていけば良い。

まあ、友達の友達が必ずしも良い縁だとは限らないけど。

「あとは幼稚園からの幼馴染み一人を紹介したら、僕の友達は全部繋がるなー」

「あ、亜理沙なら会つた。じゃああと一人だな」

そういうえば、ドラマで共演したと言つてたような気がする。何の話をしたか詳しく聞かなかつたけど、仲良くなつたのは確かだ。咲良が亜理沙と仲良くなつたなら、きっともう一人とも仲良くなれる。

小百合たちも、きっと。

「人の好みが似ているのかかもしれない」

「由宇が好きだつていう前提があるからじやないの」

智哉が溜息まじりに言つたことに、小百合と咲良は頷いた。夏田は苦笑している。

僕を好きだと言つてくれる数少ない友人たち。数少ないからこそ、大切にできる。数少ないからこそ、本物の好意だと思える。いつもの無表情から、自然と笑みが浮かんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8879c/>

紅に沈んだ言葉

2010年10月8日15時05分発行